

博士学位論文

『偶然と運命——九鬼周造の倫理学——』

古川雄嗣

京都大学大学院教育学研究科教育科学専攻

平成 17 年度進学

(論文要旨)

本論文は、九鬼周造の哲学の全体を総合的に解釈したうえで、とくにそこに含まれる倫理学的性格を明らかにしたものである。分析の視点としては、第一に、九鬼自身のテクストの全体に巨視的かつ微視的に目配りし、時間論、偶然論、芸術論といった多岐にわたる主題の有機的な関係を明らかにすること、第二に、九鬼自身が哲学とは哲学者個人の「体験に基づいた認識」であることを強調していることに基づいて、彼の伝記的側面から窺われる彼の哲学の動機に配慮することが掲げられた。

まず序章において、九鬼の伝記的側面とその哲学的主題との関連性が考察された。ここでは、九鬼の哲学の動機となった体験が、九鬼隆一と岡倉天心という「二人の父」に引き裂かれた自己の同一性、ならびに隆一と岡倉との関係に翻弄されて重篤な精神疾患に陥り、孤独な死を迎えた母・波津の「悲惨な運命」を目撃したことにあつたとの見方が示され、その体験が、実存の偶然性、ならびにその偶然的な実存の生の肯定という哲学問題に収斂していったと推察されることが論じられた。

この序章の考察を背景として、本論文では、まず第一章と第二章において、主に 1920 年代に発表された時間論と芸術論が考察され、それを基礎としながら、第三章以降において、偶然論を中心とした 1930 年代以降の九鬼哲学の本格的な展開が詳論された。

第一章では、回帰的時間の観念の論理構造とその意義が考察された。時間は水平面と垂直面の交わりという構造をもち、水平面においては異質な瞬間の非連続な連続であると同時に、その各瞬間は垂直方向に同一の瞬間を無数にもつ

ていると考えられる。そしてこの構造に基づいた「時間の永遠化」の方法として、各現在を垂直的な厚みをもつ「永遠の現在」と見る生き方、およびその都度善意志を更新してそれを水平的に持続させる生き方を九鬼は説いている。この二つの生き方が、のちの九鬼哲学の展開において、折に触れて再論されることになることが論じられた。

第二章では、芸術・文芸論が中心的に取り上げられ、九鬼哲学における芸術の論理とその意義が考察された。九鬼にとって、言葉の本来の意味での芸術とは「永遠の現在」を表現するものである。従って、やはりそれも「時間の永遠化」の方法であることが、まず明らかにされた。そのうえで、その意味での芸術は自己の人生そのものに美的形式を与え、それを鑑賞の対象とすることによって肯定しようとするものであり、その点においていわゆる唯美主義の性格を強くもっていることが論じられた。

続く第三章から第五章までは、『偶然性の問題』（1935年）を中心として、九鬼の偶然論についての解釈が集中的に行なわれた。

まず第三章では、九鬼による種々の偶然性概念の整理・分類が概観されたうえで、とくに形而上的意味の偶然性である「原始偶然」の意味内容に関する考察が行なわれた。原始偶然とは、第一義的には「因果系列の起始」理念であるとされているが、第一章の時間論と対照させることにより、これは直線的時間の原初ではなく、回帰的時間のすべての瞬間を指し示す概念であることが明らかにされた。

第四章では、前章で示された「原始偶然」概念の解釈を出発点として、「形而上的絶対者」の論理構造が考察された。絶対者とは、無限の可能性の全体としての「絶対的形而上的必然」と、その一部分が現実化したものである「原始偶然」とを両面とする「必然—偶然者」である。このことから、必然性の否定（可能性の減少）が偶然性を生み、さらに誕生した偶然性の継起と累積が再び必然性を構成していくという、「必然の偶然化」と「偶然の必然化」の往還的構造が明らかにされた。

第五章では、形而上的絶対者において必然性と偶然性とを否定的に媒介する第三項としての「運命」の概念について、集中的な考察が行なわれた。九鬼は、「偶然を必然化する原理」としての「合目的性」の問題について、田辺元と詳し

く議論している。『偶然性の問題』において示された「運命」の概念は、この議論が契機となっていることがまず示されたうえで、それはその都度の偶然を目的的に必然化する実践を意味する概念であることが明らかにされた。そのうえでさらに、とはいえ、その実践の具体的内容がどこから与えられるのかという問題が、さらに問われるべき問いとして示された。

第六章では、その問いに迫るため、考察の対象がいったん『「いき」の構造』（1930年）に移され、それと『偶然性の問題』との比較考察が行なわれた。とくに焦点となったのは、偶然性と可能性の関係である。これを厳密に検討することによって、「いき」という生き方は、偶然的な他者との出遇いの瞬間を美的に鑑賞する唯美主義的な生の肯定の論理である反面、それを必然性に展開せしめようとする未来への目的的な動向を欠いていることが明らかにされた。そしてこの他者との出遇いの必然化という契機が、「運命」の概念に具体的内容を与えるものであるという見通しが示された。

第七章では、前章で示された見通しのもと、他者との出遇いという観点から、改めて「運命」概念が再考された。偶然性とは「二元の邂逅」である以上、空間性の契機をもつものである。このことに改めて注意が向けられたうえで、「運命」とは、その都度出遇う自己と他者とが、相互に相互を内面化していく共同的な実践であるという再解釈が示された。続いて、考察の射程が1937年の論文「日本的性格」に広げられ、そこで示される「自然」概念の分析が行なわれた。「自然」とは、「運命」によって必然化された偶然性が、さらに「習慣」の媒介によってかえって偶然化した概念であるとする冒険的な解釈が試みられ、ここに九鬼哲学の一つの到達点が見られた。

以上の考察をふまえ、結論として次のことが示された。九鬼哲学の根本問題であった実存の生を肯定する生き方は、芸術と倫理という二つのそれに帰着する。前者は瞬間の垂直的な美的肯定であり、後者はその水平的な目的論的肯定である。両者は容易に相容れないものであることが改めて確認されたうえで、ここではあえて、後者の積極的意義を強調する見解が示された。その理由として、存在の偶然性をいかに目的的に必然化し得るかという問題が、「生きる意味」の生成と自覚の問題にほかならないことが挙げられ、その観点からの発展的考察が、今後の課題として示された。